

数年前の社員旅行で、埼玉県某溪谷に行った。社員旅行といっても、マスターである夫とわたしのふたり旅なのだが、〈社員旅行〉と言ったほうが、社長の羽振りがよくなるので、社員は毎年こう呼んでいる。

溪谷に通じる、長く陰しい峠があった。道路状況はよかったが、交通量がきわめて少なく、山の中の曲がりくねった一本道を、対向車にほとんど出会うことなく、うちの1台でただひたすら走った。行けども行けども、道はさらにつづいていく。

ふと道端に、古びた店がまえの小さな店やが目にはいった。その店の前を通り過ぎるとき、店の看板を即座に読んだ。〈〇〇時計修理店〉とあるではないか！ わたしは、なにかの間違いではないかと、もう一度目をこらして、しっかり見た。たしかに、かすれたペンキ文字で〈〇〇時計修理店〉とある。

いったい、客はどこから来るのか？ こんな山の中で！ 時計どころか、時間さえ必要のない山の中で、店をはっているのは、いったいどんな人だろう？ わたしは、ひとりわくわくした。帰りもこの道を通るだろうから、思いきって訪ねてみよう。

ところが運の悪いことに、行った先であいにく季節はずれの雪にあい、ノーマルタイヤだったわたしたちは、高速道路で帰宅する破目になった。社長もあの店を見たかどうか、思いきって確かめるしかない。そう決めた末に、返ってきたのは、「そんな店は、なかった。あんな山の中に、あるはずないじゃないか」と、一笑に付された答えだった。

そう、やっぱりそうだった。脛に焼きついた店がまえとは裏腹に、自信はますます曖昧になっていく。なのに、ふくらんでいくこのわくわく感は、いったいなんだろう？